

## 巻頭言

# 「職場としての放射線科」

杏林大学放射線科 土屋一洋

誰でも自分の置かれた職場は仕事をする上でいい環境であることを期待する。放射線科医としての望ましい職場とはどのようなところであろうか。個々の読者の立場の違いが大きく、ひとまとめに述べるのは無理があるのは承知の上でいくつかの視点から、ある程度多くの方に理解して頂けることを予想して私見を述べてみる。

### 診断機器

日々進歩する医療技術のなかでも画像診断装置の変化の速度は目覚ましい。とかく最先端のところに我々の目はいくがどの施設でも新しいものを次々に購入できるような時勢ではない。大学と一般病院でこの点の違いが大きいのも事実である。これらを完全解決できる知恵が筆者にあらうはずが無い。ただし既存の装置を質(検査内容)と量(検査件数)の面で十分使いこなしてきたか、という問いに「yes」と答えることができる状況にあるべきだということは一いつ言っておきたい。

従来からのCTやMRIといった診断機器に加えてデータ量の増加から新たなシステムを検査そのものやその後の読影業務に導入せざるを得ない状況も既に生まれつつある。このような「投資」が病院内で認められるか否かにも実績が大きく影響する。また相手を納得させる上ではビジネスの世界と同様にプレゼンテーションの能力も最近では重要なようである。

### スタッフ

ここではコメディカルに話を限定したい。放射線科に限らず医師以外のスタッフと良好な関係を築くことは病院を職場とする以上必須である。しかし残念ながら往々にしてこれが頭ではわかかっていても実行できない放射線科医もいるようである。とりわけ放射線技師には我々以上の知識や経験を備えた人達も多く、力になってもらうには検査の現場での彼らの立場を尊重すべきである。このほかの職種の人たちとも基本的に同様なことが言える。こういった認識を常に持っていなければお互いに気持ち良く仕事のできる環境にはなりえない。

ただし場合によっては我々が適切に「指導」しないと仕事が目詰りに運ばなかったり、その質が保てず、結果的に患者さんに不利益が及ぶことがあるのも事実である。

### 他科との関係

他の臨床科との関係において我々の立場は基本的に「サービス業」である。ただしその間に患者さんが介在している。放射線科の業務は患者さんにフィードバックされるものが存在すべきである。他科からの検査の依頼内容にこの点でそぐわないものがあればこれを指摘するのも放射線科医の仕事であろう。医療経済の視点から検査の必要性を考え、場合によっては検査をオーダーする側に示唆を与えることも昨今は重要と思われる。

一方でより積極的に他科に働きかける姿勢も無ければならない。最も単純なのはカンファランスなどの場に出向き発言することであるが、外来・入院を問わず個々の症例で必要に応じて担当医に直接話をする姿勢を持っていれば次第に各科の医師との信頼関係が強くなることが多い。

### 自己研鑽

大学にいれば研修の機会が多い。一般病院では事情が異なるが、しばしば行われている身近な研究会などには出かける機会を持ちたいし、学会にも事情の許す限り参加したい。最近では情報交換の手段が多様になっており、他の施設の放射線科医との連絡もとりやすい環境が望まれる。また上述した患者さんへのフィードバックは個人レベルのみならず広くはアカデミックな面での貢献という意味でも言えることである。自分たちの得た知見を学会発表や論文の形で還元したり世に問うことが容易にできるようでありたい。

以上は冒頭にも述べたように読者の環境によっては的外れな内容があらうし、基本的に筆者の個人的な見解である。ご意見・ご批判を賜れば幸いである。